

FD NEWSLETTER



CONTENTS

- 教育と DX
 - 教育・研究担当副学長
 - グローバル・メディア・スタディーズ 学部教授
 - 吉田 尚史
- 令和3年度公開授業の実施について
 - 公開授業に参加して
 - 文学部講師 久保 尚也
- 令和3年度第2回FD研修会報告
- 「新しい授業形態でよりよい授業をするために必要なこと～2021 年度文学部FD研修会を通じた考察～」
 - 文学部講師 久保 尚也
- FD推進委員会の今後の活動予定

教育と DX

教育・研究担当副学長

グローバル・メディア・スタディーズ学部教授 吉田 尚史

教育にも DX (Digital Transformation) が必要と言われている。教育の DX とはつまり、これまでの授業を単にオンライン化したりデジタル化したりするだけでなく、それによって教育の質が向上してはじめて、DX化ができたと言える。例えば、本学で言えば、これまで対面で行ってきた授業を、Google Meet で行い録画して履修者に公開し、学生が繰り返し録画を見ることによって、従来よりも理解が深まれば、教育 DX により質が向上したと言えるだろう。

国立情報学研究所が主催する、大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム「教育機関 DX シンポ」に出席・視聴されたことのある教員も多いのではないかと思う。このシンポジウムは、頻繁なときは毎週、最近では2～3週間に一度、それぞれの大学等の教育 DX の取り組みを発表し合う形式で行われている。これには、海外の大学を含めて事例が多数紹介されており、大変参考になる (<https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/>)。他大学の先生方の講演を聞くにつれ、やはりコロナ禍の中の学生にとっては教育の質の向上は非常に重要だと感じる。

FD も同様だと考えている。つまり、授業アンケートをオンラインで実施したり、授業アンケートの結果を授業で活用したり、結果の統計を News Letter で共有したりするだけでなく、予習復習の時間が結果的に増えたり、同一の授業について前年からの理解度の高さが向上したりするような、質の向上まで目指すべきであろう。

さらに、本来 FD は Faculty Development つまり大学教員の教育能力を高める方法を指すはずである。相互に教員が率直に教育の方法について意見交換できる環境も重要である。すでに今年度2度、FD研修会が行われた。私も参加したが、ご発表頂いた先生方の授業内容に心を動かされた。さらに、ご発表頂いた教員へのコメントに、「オンライン授業あるあるですね」とおっしゃる先生方と、「その方法はとてもできない」とおっしゃる先生方と、反応が多様であることにもまた、心を動かされた。授業の実践的方法を共有する場と、それをまた広める場といったような、地道な活動もまた重要ではないだろうか。

令和3年度公開授業の実施について

令和3年度「公開授業」を以下のとおり実施した。「公開授業」は、授業改善のための教員による相互研鑽を目的とし、工夫に富んだ授業に接し、その体験によるさまざまな発見を通して、今後の授業改善のためのヒントを得ることにある。

公開授業は、各学部等のFD推進部会のご協力により、各学部等主体にて実施された。

| 学部 | 担当教員 | 実施日 | 時限 | 教場 | 科目名称 |
|---------|----------------------------|-----------|----|---------------------|------------|
| 仏教学部 | 岩永 正晴 (主担当) 徳野 崇行 (副担当) | 11/11 (木) | 1 | オンライン | 坐禅Ⅱ |
| | 八尾 史 | 11/11 (木) | 2 | 3-606 (オンライン併用) | 仏教研究C |
| 文学部 | 飯田 洋介 | 11/25 (木) | 1 | 3-805 (オンライン併用) | 西洋史学演習Ⅰ |
| 経済学部 | 井上 智洋 | 11/19 (金) | 1 | オンライン | 経済政策b |
| | 吉村 純一 | 11/11 (木) | 2 | オンライン | マーケティングb |
| 法学部 | 小嶋 崇弘 | 11/16 (火) | 4 | オンライン | 知的財産権法 |
| | 三竹 直哉 | 11/25 (木) | 3 | オンライン | 比較政治学 |
| 経営学部 | 村山 元理 | 11/22 (月) | 2 | 2研-203 (オンライン併用) | 企業論 |
| | 青木 茂樹 | 11/24 (水) | 1 | オンライン | 市場戦略概説B |
| 医療健康科学部 | 村田 渉 | 11/13 (土) | 1 | オンライン | 画像工学概論Ⅲ |
| GMS学部※ | 松前 恵環 | 11/25 (木) | 4 | 1-301 | メディア法応用 |
| 総合教育研究部 | 柿原 和宏 | 11/26 (金) | 3 | 1-303 (オンライン併用) | 日本文学を学ぶ(4) |
| | 笛田 千容 | 11/25 (木) | 2 | 3-810 (オンライン併用) | スペイン語ⅡDb |

※GMS学部＝グローバル・メディア・スタディーズ学部



公開授業に参加して

文学部講師 久保 尚也

この度、公開授業として文学部歴史学科の飯田洋介先生の木曜1限の『西洋史学演習I』に参加させていただきました。本稿は飯田先生の授業に参加させていただいた所感についてまとめたものになります。ご参加できなかった先生方の参考になれば幸いです。

この日の授業は、史料を通じて次の2点について考察するというものでした。ひとつはナチ党の独裁体制構築の一要因となった全権委任法（授權法）の制定が与えた影響、もうひとつはその全権委任法を批判した社会民主党のオットー・ヴェルスが予見していたことについてです。前者については、全権委任法が制定された背景や全権委任法の特徴から、後者についてはオットー・ヴェルスの演説の内容をもとに検討をしていきました。授業は前半と後半の2つのパートにより構成する形となっており、前半は史料を読み、その史料から必要な情報をグループごとにまとめるという作業を、後半は各グループがまとめた内容をもとに上述した2点について検討するといった形で授業が進められました。

飯田先生の授業で印象的だったのは、google スプレッドシートの活用の仕方です。飯田先生は、事前にgoogle スプレッドシートに史料から読み取るべき事項を挙げ、授業の前半においてその事項に対応する読み取った内容をグループごとに入力してもらうという方法を採用していました。学生と教員の全員がシートを共同で編集できる状態になっているため、各グループが入力している内容を即時的に閲覧できるという利点がありました。この形式であればハイフレックス形式の授業においても、オンラインと対面で参加している双方の学生を対象に演習形式の授業が行いやすいと個人的に感じました。また、後半の解説時においても各グループがまとめた内容をスプレッドシートにて閲覧できるため、各グループがどのような考えのもと情報の取捨選択を行ったかなど、細かい点を確認しながらそれぞれのフィードバックを聞けるという利点があります。この利点により、実際にフィードバックをもらっている学生だけでなく、他の学生にとっても有益な時間になっていたのではないかと思います。

以上のように、今回の公開授業については自身の授業にも活用できる工夫を知ることができ、非常に有益なものとなりました。また今回、久しぶりに世界史の

授業を受け、改めて歴史の授業の面白さを認識する機会にもなりました。最後にこのような有益な公開授業を実施して下さった飯田先生に厚く御礼申し上げます。



令和3年度 第2回FD研修会報告

第2回FD研修会は、令和3年9月10日14時より、オンライン（Google Meet）で開催されました。出席者は158名、そのうち学外から8名の参加がみられました。瀧本誠准教授（総合教育研究部）の司会のもと、「コロナ禍でのオンライン授業運営に係わる実践事例紹介」をテーマとし、第1部では講演、第2部では質疑応答・情報交換会が行われました。なお、本研修会は世田谷プラットフォームの後援として実施されました。

第1講演では、徳野崇行准教授（仏教学部）より、ハイブリッド授業の実例が紹介されました。ハイブリッド講義では、教場の板書も取り入れてました。学生の授業の満足感を高め、集中力を持続させるためとのことです。また音声を学生に確かめてから機材を使い分けるなど、学生目線の改善も行われていました。ハイブリッド演習では、議論を深めるために、対面で議論する班とオンラインで議論する班に区別されていました。ハイブリッド坐禅では、坐禅堂に配信機器一式を持ち込んでいました。オンライン授業で起こりうる問題への対応や機材の紹介など、参考になる情報が多い講演でした。

第2講演では、高田実宗准教授（法学部）より、オンデマンド動画の実践例が紹介されました。まず、授業の導入部分では、学生からの質問や前回の小テストについてフィードバックを行います。さらに身近な話題を取り上げ、授業への橋渡しを行います。続いて、手書きで要点だけを書いた紙をカメラに映しながら、授業を行います。パワーポイントを用いると、かえってその作成に凝ってしまうことと、情報量が多くなりすぎてしまうとのことです。講演でも、実際に手書きの紙を用いて説明されていました。学生の興味を惹きつける工夫を盛り込まれた講演でした。

ここで取り上げたのは、両先生の教育技法の一部にすぎません。研修会の動画は、2022年3月31日（木）まで視聴できますので、ぜひご覧ください（KOMAnet ユーザID限定）。

（星野 真）

連載企画：よりよい教育のために

「新しい授業形態でよりよい授業をするために必要なこと
～ 2021 年度文学部FD研修会を通じた考察～」

文学部講師 久保 尚也

新型コロナウイルス（COVID-19）が世界的に流行し、日常生活が一変してから早くも2年が経過した。この新型コロナウイルスによる影響は教育現場にも大きな変化をもたらし、教員は“オンライン授業”、“ハイブリッド授業”という新しい形態の授業を取り入れることを余儀なくされた。文学部では、2021年度のFD研修会のテーマとし、今年度多くの教員が本格的に実施することとなったハイブリッド授業に焦点を当て、ハイブリッド授業の特性、教育効果を高めるための授業の工夫について検討を行った。本稿は、この文学部FD研修会の内容について報告するとともに、ハイブリッド授業のような、新しい授業形態でよりよい授業を行ううえで必要なことについて考察をしていく。

(1) ハイブリッド授業の特性

ハイブリッド授業の特性を理解するため、研修会ではハイブリッド授業の長所と短所について3つの観点からまず検討を行った。ひとつは教員にとっての長所と短所、ふたつめは学生にとっての長所と短所、そして3つめは対面・オンライン授業と比較した際に見える長所と短所である。文学部を構成する学科は国文、英米、地理、歴史、社会、心理と多領域にわたるが、分野にかかわらず共通する長所と短所が浮かび上がった。

共通していた長所と短所は次の通りである。教員、学生にとっての長所と短所について表にまとめたものを図1に示す。教員、学生の両者にとって長所となりえるのは、どこにいても出席が可能というweb会議システムを利用することで得られる恩恵に起因するものであった。短所については、“オンライン、もしくは対面参加の学生の対応をしている場合、他方の形態で参加している学生の対応ができず、授業の質が低下する”といった、対面で受講する学生とオンラインで受講する学生が混在することでおきる問題であった。

従来の対面型、オンライン授業と比較した場合については、オンライン授業よりも授業らしくなること、

オンラインもしくは対面のどちらかを選択できるため、受講の自由度が高いといった点が長所としてあげられた。しかし短所としては対面、オンラインよりも授業準備や授業の運営にかかる手間が非常に大きいことがあげられた。

これらの長所と短所の検討結果からハイブリッド授業の特性として次のことがあげられる。それは、対面授業とオンライン授業の両方の授業形態の長所を保持しているということ、ハイブリッド授業は図2のようにオンライン受講と対面受講の2種の受講形態が混在するため、教員は対面とオンラインの2種の場の授業をそれぞれ円滑に進めなければならないという特徴である。



図1 教員・学生におけるハイブリッド授業のメリット・デメリット（文学部FD研修会資料より）

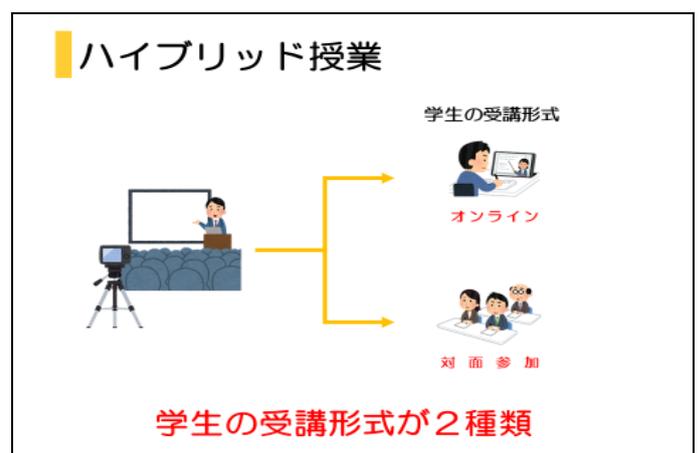


図2 ハイブリッド授業の受講形式（文学部FD研修会資料より）

(2) ハイブリッド授業における工夫

研修会では上記のハイブリッド授業の特性について検討を行った後、実際に行っている実践例の情報共有、教育効果を向上するための工夫としてどのようなことができるのかについて検討を行った。

7月に研修会を開催したため実践例については、配信確認用にタブレットを使用するなど、配信トラブル早期発見のための工夫や、オンライン参加、対面参加共通で使用可能な教材の作成など、ハイブリッド授業を円滑に実施するための工夫が中心となった。授業時の教育的効果の向上のための工夫については、ハイブリッド授業の一種であるブレンド型にて実施するという案がだされた。この案は、たとえば1回目の授業ではオンデマンド形式にて学術的な知識の教授を行い、2回目の授業では1回目の授業内容にもとづいた内容の演習や体験学習を対面にて実施するといったもので、授業内のワークや体験授業の割合を増やすことで教育効果の向上をはかろうという工夫である。

(3) 授業工夫を実施するうえで必要なスキル

今年度の文学部FD研修会を終え、個人的に感じたことは、各教員ともまだ手探りの状態でハイブリッド授業に取り組んでいること、また講義の同時配信や機器操作がうまくいくのかという不安が根強いということである。これらはハイブリッド授業の実施経験が少ないこと、対面で参加している学生とオンラインで参加している両方の学生の対応を同時に実施せねばならないという特殊な環境に初めて晒されていることに起因していると推察される。

より良い教育のための工夫は、問題なく授業を実施できるようになってから始めてなされていく。そのためハイブリッド授業において質の高い教育を行うには、機材やweb会議システムを使いこなすスキルを習得していることが前提となる。これらのスキルを効率よく習得するためには、知識、スキルとして自身に何が不足しているのかを確認し、そのうえで各スキルをスモールステップで習得できるようなシステムや機会を設けることが重要である。そしてこれら前提となるスキルを習得したうえで、さまざまな授業工夫の事例の情報共有をすることにより、新しい形式の授業においても教育的効果を上げていくことができるのではないかとと思われる。


FD推進委員会の今後の活動予定

- 令和3年度第7回FD推進委員会小委員会
令和4年1月20日(木) 14:00～
- 令和3年度第4回FD推進委員会
令和4年1月28日(金) 16:20～
- 令和3年度学生が選ぶベスト・ティーチング賞授賞式および第3回FD研修会
令和4年2月15日(火) 14:00～
- 令和3年度第4回FD研修会
令和4年2月24日(木) 14:00～
- 令和3年度第8回FD推進委員会小委員会
令和4年2月25日(金) 14:00～
- 令和3年度第5回FD推進委員会
令和4年3月9日(水) 14:00～

※FD活動についてご意見がありましたら、各学部等の小委員会委員までお申し出ください。



編集後記

学生が選ぶベスト・ティーチング賞（BTA）の投票が終了しました。教職員の皆様、ご協力いただき誠にありがとうございました。

今回の BTA に、殿堂入り制度とプラスワン賞が導入されました。また、BTA の推薦理由に選択肢方式が追加されました。対面では会ったことがない学生も多い中、学生 FD スタッフは、毎週のオンライン定例会議と、Slack（チームコミュニケーションツール）を通して検討を重ね、新しい企画を生み出しました。

学生 FD スタッフの活動は、BTA の新企画導入、受賞教員へのインタビュー、学長との意見交換会といった、表舞台に立つものばかりではありません。ポスター作成、動画のスライド作成、音声吹き込み、SNS での広報文章作成、トロフィーのデザイン考案、パンフレット作成など制作が多いです。また定例会議の進行、オンライン懇親会といった組織の運営もしています。ご担当の授業や演習等で、学生 FD スタッフの学生と接する機会がありましたら、ぜひ褒めていただければと思います。生の声は学生 FD スタッフにとって大きな励みになります。

学生による授業アンケートのメ切りは 12 月 24 日（金）です。今後とも、学生目線の教育改善にご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

（久保 尚也・星野 真）

※駒澤大学 F D（Faculty Development）ホームページは、以下 URL か QR コードからアクセスできます。

【URL】<https://www.komazawa-u.ac.jp/about/fd/>



駒澤大学 FD 憲章

- 一、私たちは、常に新しい教育方法を模索し、教育活動の質の向上に努めます。
- 一、私たちは、常に自らの教育方法をふりかえることで、教育活動の改善に努めます。
- 一、私たちは、常に教員相互の情報交換をすることで大学全体の教育の質の向上に努めます。
- 一、私たちは、常に学生、または社会からの声を大切に、教育活動の改善に努めます。
- 一、私たちは、知を人類の資産として未来へ継承し発展させるよう、学生とともに歩むことを誓います。



【タイトル横の写真は、種月館（3号館）外観】

FD NEWSLETTER Dec. 2021 第 67 号

発行日：2021 年 12 月 15 日

発行者：駒澤大学 F D 推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1

TEL 03-3418-9444 Fax 03-3418-9114

（事務局：教務部）